



国境なき子どもたち (KnK)

ヨルダン フヘイス、
イラク人避難民およびヨルダン人青少年に対する
心理社会的ケア ビデオワークショップ
イラク避難民支援 (ヨルダン) 2008年2月-3月

実施報告書

報告者
ビデオワークショップ講師 清水 匡

作成日 2008年10月30日

国境なき子どもたち ビデオワークショップ 2008年 ヨルダン

- I. 実施期間 2008年2月19日-3月6日
- II. 場所 ヨルダン フヘイス ユースセンター
- III. 対象者および人数 ヨルダン人5名(男子2名・女子3名)
イラク人9名(男子5名・女子4名) 計14名
年齢14歳~17歳

IV. 参加者の選出

事前に参加希望者を対象に簡単な心理テストを実地し、特にトラウマを抱えている子どもたちを中心に、男女それぞれヨルダン人とイラク人計14名を選出した。

V. 目的

安全を求めてヨルダンに避難民として逃げてきたイラク人たち。そこで待っていた生活は決して安定したものではなかった。難民申請が通らないために一時滞在者という不安定な状況下、就業も認められず、子どもたちも2007年まで学校に通うことすらできなかった。こうした状態の中で突然イラクに強制送還される人たちも多く、異国で隠れるような生活を余儀なくされている。ヨルダン人の中にはそんなイラク人に同情を寄せる人たちも多いがイラク人の本当の状況を理解している人たちは少ない。

国境なき子どもたちは、ビデオ制作でイラク人のヨルダンでの生活を描くことで、イラク人は自分たちの状況を伝え、ヨルダン人はイラク人抱える苦悩を知り、このワークショップを通じてお互いがより深く理解することで子どもたちを取り巻く生活環境を向上させることを目的としている。

VI. 内容

①カメラを触ろう ~ビデオカメラは面白い~

実際にビデオカメラに自由に触れさせることにより、お互いの緊張を和らげ撮影の楽しさを体感してもらった。次に撮影したものを考察し、「良い点」、「悪い点」を挙げることで撮影には技術が必要なことを認識させ技術を学びたいという気持ちを起こさせた。

イラク人とヨルダン人の男女が偏ることがないように3班に振り分け、それぞれに、監督係、カメラマン係、サウンド係、三脚係と各自



に仕事を与えることによりチームワークの育成と責任感を養った。

また、子どもたちには ID カードやスナック、食事を提供し参加を促した。中でも ID カードを発行したことは、各自がメンバーであるという意識向上させモチベーションを高める結果となった。

参加者に喜ばれた ID カード



②カメラ操作と基本的な技術

ビデオ撮影は、基本的な技術を習得すれば見違えるほどプロに近づくことができる。カメラの持ち方、操作の仕方や動かし方、フレークの決め方、三脚の使い方、音の大切さなど、これらの技術の一つずつ実践しながら学んでいった。覚えが早い子は別の子に教えたり、少しでもカメラを触ってたくてわがままをいう子には譲ってあげたりと、お互いが少しずつ協力しながら馴染んでいった。

③インタビューの練習

ドキュメンタリーにインタビューは欠かせない。質問する人、撮影する人、インタビューを受ける人をチーム内で交代しながらインタビューの練習を行った。インタビューでは普段、友達同士の会話では遠慮してあまり聞くことができないプライベートな質問や作品に色を付けるためにさらに突っ込んだ質問もしなければならぬこともある。こうした場面においては、質問する側に「質問すること」に気遣いと勇気があることを認識させる効果がある。また、友達同士でインタビューし合うことにより、これまで気がつかなかったお互いを知るきっかけとなった。



④作品のテーマ作り

基本的な技術を習得した後、今回制作する作品のテーマ作りを行った。テーマを見つけることと相互理解を進めるために、イラク人参加者にはイラクでの出来事やヨルダンに来たときのことを発表してもらい、ヨルダン人にはそれぞれが抱える悩みを話してもらった。イラク人の中には、イラクで起こった自分の過去を話したがらない子もいたが、その子の

気持ちは皆で尊重し無理に話をしなくてもいいように心がけた。イラク人の悲惨な過去を始めに聞いていたヨルダン人は、辛いのはイラク人だけではなく、ヨルダン人の自分たちも家族の問題や友人間での悩みなどがそれぞれあり、平穏な生活の中にも悩みや辛い過去があるということを発表した子もいた。イラク人も自分たちだけが辛い思いをしているのではないことに気づくきっかけにもなった。それぞれの発表が終わり、今回の作品にはイラク人男子の体験を元に作品制作をすることを全員で確認し本人も合意した。



⑤画コンテ作成

イラク人男子の体験を元に画コンテ（ストーリーピクチャー）を作成し、この画コンテに沿って撮影を進めていった。イラクで友人を目の前で殺害されるという衝撃的な体験からヨルダンでの現在の生活を本人が直接演出し、ロールプレイを用いることで撮影を行っていった。



画コンテを作る



ロールプレイを演出する



撮影や演出の指導をする講師



⑥問題に直面

ビデオ制作は順調に進んでいくはずだったが、途中大きな問題に直面してしまった。それは、すでに撮影した内容の一部を使用しないで欲しいというイラク人コミュニティからの要請だった。その理由は、そのシーンが公の場で公開されるとイラク人参加者とその家族に問題が降りかかる可能性があるということだった。しかし、そのシーンを使用できないと作品が成り立たなくなってしまうため、緊急にミーティングを開き参加者の意見を聞いた。参加者の意見は以下の通りであった。



熱演するもこのシーンは使用できなかった

「せっかく時間をかけて撮影したので使用したい」
「顔を隠せば使用できるのではないか」
「ほかのシーンを撮影したい」など。

当初、参加者は何とかして撮影したものを使用したいと希望していたが、使用することで自分たちの仲間に危険が及ぶ可能性があることを考慮して映像の使用を断念した。彼らは自分たちが力を合わせて撮影したものが使用できないという現実を目の当たりにして憤りを感じていた。そして、この憤りやストレスはヨルダンで生活するイラク人の持つストレスと共通するのではないかという疑問に達した。ビデオ作品は当初考えていたものが作れなくなってしまったが、現実起きたこの問題を取り入れることにして制作を進めていった。その表現には、事前に作っていた「画コンテを破り捨てる」、「使用できなかったテープを壊す」といったことで、参加者の怒りを表した。



画コンテを破り棄てて表現する

⑦上映会

こうして出来上がった作品は、セレモニーと称して上映会を行った。ゲストには日本大使館、ヨルダン政府、イラク政府、フヘイスのイラク人コミュニティ、同じくヨルダン人コミュニティの方々、総勢 150 人以上をお招きした。上映後、ステージの前で参加者一人ずつに修了証書を手渡すことでビデオワークショップを終えることができた。セレモニーにはヨルダン国立テレビ局の取材も受け、その様子は、3月9日の午前中に放映された。なお、現地の心理療法士によるカウンセリングをその後も引き続き行っている。



修了証書を配った



大勢の観客の前で作品を披露した

所見

始めは順調にワークショップを行っていたが、イラク人コミュニティから 2 度も撮影に関しての危機感ともいえる意見が出た。その度に参加者同士が真剣に話し合い、問題を乗り越え作品を完成するに至ったわけだが、国籍とバックグラウンドが違う子どもたちを相手のワークショップの中で、最初はイラク人とヨルダン人の間で目に見えない壁を感じた。しかし、作品を作り上げていくというひとつの大きな目標を全員が強く意識したことと、問題に直面した際、「撮影したものを是非使いたい」という気持ちと「友だちや家族を守らなければいけない」という気持ちで揺れ動くことにより、参加者の中に様々な感情が生まれ、その気持ちをお互いが共有することにより、国籍を超えた仲間意識のようなものが生まれた。仮にこの問題でビデオ作品が完成できなかったとしても、参加者が共に悩み、苦しみ、そして楽しむことができたことにより相互理解ができたことは大きな成果といえる。

最後に参加者全員に「あなたの一番大切なものは何ですか」という質問を投げかけた。その答えで印象的だったのは、ヨルダン人は「成功」、「将来」、「愛」などと答えたのに対して、イラク人は「イラク」、「バクダッド」、「安心して暮らせる場所」などを挙げたのが強く印象に残った。中でも「セキュリティ」と答えたイラク人少年がいたが、わずか 14 歳でこのような答えが出るということは、いかに彼らの心が深く傷ついているかを物語っているのではないだろうか。